

戸板康二

回想の戦中戦後

戸板康二
回想の戦中戦後

青蛙房刊

書名 回想の戦中戦後
著者 戸板康二
発行者 岡本経一
印刷 三協美術印刷株式会社
製本 株式会社関川製本所
用紙 王子製紙株式会社
表布 望月株式会社
製函 日の出紙器有限公司
発行 昭和54年6月25日
定価 一、七〇〇円

発行所

有限会社

青蛙

房

東京

東京都文京区本郷二ノ一七ノ九

振替東京 九一七二三八四
電話東京 (八一三) 一五九七

0095—00372—3800

装画 末木澄山

回想の戦中戦後

目次

前説・ふるさと東京…………… 五

1 うまれた町…………… 六

2 かよった学校…………… 三

3 つとめた職場…………… 三

回想の戦中戦後…………… 元

1 終戦の日の前後…………… 四

2 占領時代のアメリカ人…………… 五

3 危機に瀕した歌舞伎…………… 六

4 日本演劇社の人々…………… 七

5 よその雑誌の出版…………… 九

6 わが交友記(上)…………… 八

7 わが交友記(中)…………… 一〇

8 わが交友記(下)…………… 二六

9 編集室の哀歓…………… 二七

10	芝居にかよう生活	一七
11	三越六階の劇場	一〇
12	そのころ見た新劇	一五
13	戦後窮乏の時代	一六
14	鎌倉の「茶の間の会」	一六
15	折口先生と「例の会」	一八
16	NHK日曜娯楽版	三二
17	電波に乗った声	三〇
18	「三田文学」との縁	三八
19	ホテルのパーティー	三六
20	わが町になった京都	三四
21	新庄に友を訪う	三四
	おわりに……………	二九

前説・ふるさと東京

戦中戦後という表現を用いるならば、太平洋戦争のはじまる昭和十六年十二月八日より、もっと前から非常時と呼ばれる時代があり、じわじわとしめつけられて行く不安で憂鬱な歳月を、日本人それぞれが体験したと思う。

そういうふうになると、学校を出たころから書きはじめなければならないかも知れない。多くの場合、明治製菓の宣伝部にはいって、その分掌業務の性格からいっても、ときよじ時節に、まことに敏感だった。

戦争のおわる時にいた演劇雑誌社は、情報局に管轄されていたのだから、もっと事情は深刻である。

戦後をいま、十年に大体区切って、昭和三十年あたりを目安に、ぼくの「戦中戦後」を、率直に記述してみたい。

ただ、その前に、ぼくの生まれた町と、かよった学校と、つとめた職場について、一応書くことを、許していただく。

ぼくは大正四年十二月十四日に生まれた。赤穂義士の討ち入りの日である。後年、「忠臣蔵」という本を書いたのも、因縁というものであらう。

父親は山口三郎といって、その年、藤倉電線会社の営業部に入社して間もない平社員であった。母親が、戸板裁縫女学校を創立した戸板関子の娘で、父と結婚する時に、最初に生まれた子供を戸板家の養子にする約束があったらしく、ぼくは七歳の時に、改姓して、祖母の戸籍にはいつている。

戸板関子の夫は武田芳三郎という沼津の人だったが、ユニテリアン教会の牧師をやめて、妻の女学校の後見人みたいな立場になった時、戸板芳三郎となる。いわゆる入夫にゅうふをしたわけだ。この母方の祖父の記憶は、ごくわずかである。「河内山」の芝居で、宗俊が上州屋に十徳とくを着て来る。それを祖父の死んだ直後に見た時、その祖父を思い出したところを見ると、日常そんな格好をしていたらしい。

ぼくの小学一年の時までしかいなかった祖父は、食卓で白湯さゆに塩を入れて、いつも飲んでた。それだけしか、おぼえていない。

十二月十四日に生まれたので、父は良雄と命名しようと思ったが、結局康夫にした。御大ごだい典てんと呼ばれる大正天皇の即位式があった年で、こういう名前にしたのだとよくいわれたのだ

が、事情はわからない。京都方広寺の鐘銘のような、たとえば国家安康とでもいう言葉を、政府が流行させたのではないかと思う。

じつは、こんなことがある。最近読んだ矢野誠一氏の「私の信条」は、大企業の経営者の地位にいる実業家の会見記なのだが、生年月日の順序に編集してあるので、ぼくはまっ先に、ぼくよりちょうど一ヵ月早く生まれた、東京貿易の社長松宮氏の記事を読んだ。ふしぎにも、その人の名が、康夫というのである。きっと、康の字が、何か根拠にあったのだろうと推理した。

ところで、山口康夫が戸板に改姓したら、姓名判断ではよくないということになって、二劃へらして、康二と改めた。戸籍謄本を見ると、届出があったので、改名をみとめた旨、書き入れている。つまり、法的に承認してもらっているわけだ。

改名は犯罪者が悪用するといけないので、同一町名に同姓同名がいる、あるいは、世襲の名前を名のといった除外例だけしか、みとめられないはずなのだが、よく区役所が受理したものだと思っていた。

戸板関子の義母で、終戦の年に九十四歳で死んだ曾祖母に、中学生のころ、その疑問を提出したら、「親戚が区役所にでもいたんじゃないの」と、事もなげにいった。まことに、ふ

しぎな返事だが、そんな人がいたとは聞いたこともないのである。

生まれたのは、芝三田^{みだしこくまち}四国町にある祖母の女学校と、電車通りをへだてた平家^{ひらや}の小さな家だったらしい。

その後、女学校の校舎はコンクリート建てになり、地下とも四階の建物の中に、裁縫女学校と三田高等女学校とが教室を持っていたが、戦後に中学校、女子高等学校、女子短期大学というふうに拡張して行き、総称して戸板学園という。

ただし、ぼくは、祖母の意に反して、この女学校の教育事業とは、昔も今も何のかかわりもない。「戸板」という姓だから、家名をついだが、学校は、祖母の没後、母の妹に当たる青木朝子が校長になり、いまはその叔母のひとり息子の青木英夫が学長である。

生まれたのは三田だが、ぼくとしては、その次に移った代々木^{さんや}山谷の家を、かすかにおぼえている程度である。

あとで知るのだが、代々木にいる時、近くで明治神宮が造営されていたらしい。その家も小さかったが、門とめぐらした垣根があり、似たような家の並ぶ横町に面していた。家を出て左折してしばらくゆくと、川べりに父のつとめていた会社の電線工場があった。

ぼくは、久留島武彦という童話家を園長とする早蕨^{さわらび}幼稚園の分園にかよっていたそうだ。

犬張子いぬはりこの徽章のついたエプロンを着けていたそうだ。

三田四国町にいた時か、代々木に来てからか、縁側から敷石におっこちて、頭にかなりの怪我をしたらしい。繻帯をした顔を鏡で見たような気がしているが、これも、あとから教えられて、思い出を勝手に作りあげたのかも知れない。

大正十年に三十歳の父が上海シャンハイの出張所を開設にゆき、帰国してから、芝山内さんないの金地院こんちいんの境内にある家に住んだ。そして、半年経って関東大震災があり、鎌倉にその年の夏祖母が建てた別荘に行っていた臨月の母が、圧死した。健夫という当時三歳の弟は、母の身体にかばわれて、生命を救われたのである。

父が母の死を悲しんで綿々と書き綴った手記が古カバンにしまっているのを、大学にはいつから、偶然知った。

慶応の理財科（経済学部の旧称）を出たのだが、父は文学青年だったらしく、文集を三冊残している。いずれも学生時代に書いたもので、墨書したその一冊には「忘れ貝」という題がついていて、小説も作っている。

また、文芸協会の松井須磨子主演の「思い出」（アルト・ハイデルベルヒ）の劇評も書いたりしているのだが、当時の「歌舞伎」などにのった問答形式を真似ているのが、おもしろい。

祖父が農商務省の役人だったところ、日本橋の浜町にいたことがあって、父は有馬小学校で、東洋文庫の石田幹之助さんと同級だったという。

下町したまちで育ったので、明治座や中洲なかつすの真砂座まさざには、しじゅう行っていたらしいし、くわしく聞いたおぼえはないが、町内で歌舞伎の好きな仲間と、しろうと芝居をしてもいたようである。おどろくほどいろんなセリフを知っていた。

ぼくを連れて芝居に行くので、子供のころから、ぼくは劇場に親しんだ。何を見たのかハッキリいえるのは震災後だが、麻布の南座で見た七代目中車の「寺子屋」、本郷座で見た「桐一葉」の舞台は、目に残っている。二代目延若の石川伊豆守が自分で目をえぐる場面が、こわかった。

日曜日に、天気がいいから郊外にでも行こうなどといって子供を連れ出し、結局浅草に行つて、松竹座にはいつてしまう。そんなことが何回もあったが、こっちも、芝居が好きになつていたから、うきうきした。

六つ年下の弟に母親がいなくなったので、鎌倉で母の死んだ時もそこに居合わせた、中丸と、という珍らしい名前の女中が、弟の面倒を見、しばらくのちに父が再婚するまで、自分の子のように可愛がつっていた。

このと、の女は会津の人だったが、なぜか歌舞伎をよく知っていて、「三千世界に子を持った親の心はみなひとつ」とか、「松右殿松右殿、逆櫓さかろうの稽古にまいったまいった」などと口走っていた。

それがどういう芝居のセリフなのかを、ぼくが知ったのは、中学生になってからである。この女性は、戸板女学校にときどき荷を持って反物を見せに来る、住吉屋という呉服屋の番頭と結婚した。

三田四国町という町について、多少書けるのは、祖母がずっと女学校の中に住んでいたからである。

市電の三田四国町という停留所が、学校の前にあった。車庫がある当時の終点は三田と改称したが、前は薩摩原さつまはらという名の停留所で、この薩摩原から出る電車には、しじゅう乗った。日比谷から神田橋、小川町、須田町と通って上野へゆく線で、次の停留所が、芝園橋であった。

震災の前に神田美土代町みとしろやうのYMCAで「オーヴァー・ザ・ヒル（丘を越えて）」という活動写真を見る会があった。慈善会か何かの催しだったと見えて、祖母が教員や生徒をつれて大ぜいで見に行き、ぼくもついて行った。

その日大停電があつて、神田から三田まで、みんなでそろそろ歩いたのを、おぼえている。この日見た写真は、今思えば典型的な母ものであつた。

最初にはいったのは、御成門おなりもんにある愛宕小学校あたごで、芝の山内さんない（公園地）に住んでいる家の子は、この学校にゆくことになっていたのである。同級に寺島誠三という色の白い少年がいて、それがいまの七代目尾上梅幸である。同じ教室にいる寺島が丑之助という名前の子役で出演している舞台を、ぼくは市村座や新橋演舞場で何回も見ていた。

寺島の家にも行って、その父親の六代目菊五郎に、菓子をもらったりしてゐる。震災で愛宕が焼け、戸板女学校の真裏にある芝小学校にいわゆる二部教授で、午後授業を受けに行っていたが、ぼくの意味とは無関係に転校がきまり、九段にあるカトリックのミッシェンスクールの暁星小学校ぎょうせいに、大正十三年四月から、かようことになった。三年B組への編入である。行ってみるとA組に、寺島が、転校して来ていた。

三田四国町には、暁星のかえりに、よく行った。ひとつには、習字を習わせられたからである。女学校の先生をしていた女流書家の阿部梅莊女史だったのである。

この女史は、東京府知事をしていた阿部浩氏の夫人で、長男が洋画家の金剛氏、その金剛画伯と結婚したのが、作家三宅やす子の娘の艶子さんであつた。

四国町の界限は、べつに棚橋^{あやこ}綱子という、当時八十をこしていた長命の校長がいる東京高等女学校、それからとユニテリアン教会だった建物などがあるほかは、日本電気や池貝鉄工所の工場があり、芝園橋から赤羽橋へゆく通りを左のほうにはいると、機械油のにおいをする小さな町の工場が数多くあった。

四国町のぼくの生まれた家の隣りも町工場で、その家の主人、つまり社長だが、前を通ると、「大きくなったね」といつまでも声をかけるので、きまりが悪かった。

その工場とならんだ芝公園寄りに、タチバナというレストランがあつて、アイスクリームをよくとってもらつた。時には輪にした曲物^{まげもの}を皿のあいだにはさみ、^{おかもち}罔持に入れたメンチカツ、ハヤシライスを届けてもらふ時もあった。ぼくは、ハヤシライスは、林というコックさんが作っているのだと思ひこんでいた。

祖母は、女学校の一階の南の隅の二間続きの部屋に住んでいて、長火鉢を一方の部屋に置いている。その長火鉢のひきだしに、灸のもぐさがいって、膝の下^{さふり}のいわゆる三里に、自分で据えていた。

この長火鉢の火で、しじゅうシャケを焼いてもらった。祖母も曾祖母も仙台の人で、会話を相当な訛りがあったが、塩鮭を塩びきと呼んでいた。子供の味覚はあてになるものでない